

福島原発事故被災地域のレジリエンスを強める地域伝統芸能

——福島県伊達市霊山町「霊山太鼓」を事例として——

長澤 壮平

1. はじめに

現代社会を取り巻く環境は厳しさを増しており、持続不可能な諸要素が徐々に明らかになってきた。たとえば多くの採掘資源や食資源などは、すでに回復不能であり、極度の高温化が進むなか、大規模な自然災害のリスクも高まっている。過剰な生産に依存した経済は莫大な資源利用を前提としており、このままのシステムが持続可能とは考え難い (Morin and Kern 1993)。「持続可能性」として広く意識されるようになった目標は、もはや多くをあきらめなくてはならない状況にある (Zolli and Healy 2012)。今後の世界においては、もはや避けられないであろう極度の状況変化を前提としたうえで「人間の適正な活動の維持」を図る必要があるだろう。こうした大局的な課題に対して、本稿では地域社会をいかに健全に維持しうるかを考える。そこで注目するのが、現在、活発に議論されている「レジリエンス」という概念である。レジリエンスとは「システム、企業、個人が極度の状況変化に直面したとき、基本的な目的と健全性を維持する能力」(Zolli and Healy 2012)であり、これを準備し、促進する諸条件を特定するために用いられる枠組みである。したがって、それらの諸条件についての知見を重ねることは、極度の状況変化に対して柔軟に対処し、回復する地域社会の構想につながるができる。

本稿で取り上げるのは、2011年、福島第一原子力発電所の事故によって被害をこうむった伊達市霊山町の地域社会である。そこでは原発事故によって大量の放射性物質が降り注ぎ、農地や山林が甚大な被害を受け、多くの人の避難、食物の汚染、感謝料の不公平などによって社会的分断が生じた。こうした極度の状況変化は地域社会の衰退につながったように推測されるものの、たくましく地域が維持され活性化された側面もあった。そのひとつとして、地域伝統芸能「霊山太鼓」に関わるさまざまな活動がある。アルドリッチは福島原発事故を取り上げ、地域のソーシャル・キャピタル、すなわち信頼や絆で結びついた社会関係が、地域社会のレジリエンスや復興に寄与していることを明らかにした。とりわけ重要な主張は、国や企業による大がかりな復興施策よりも、地域社会の仲間とのつながりこそが復興に寄与しているという点である (Aldrich 2021)。それは逆に、小規模予算の政策介入でも、大きな効果につながる可能性を示唆している。本稿はこうした主張を踏まえ、とくに地域伝統芸能の効用に焦点を当てるものである。地域の伝統芸能が、芸の良さや「こだわり」、および練習や上演の場を共有することで、仲間たちのつながりを深めることは、筆者がすでにいくつかの論文で示してきた (長澤 2007; 2010)。福島原発事故以降の復興に関連して、高倉 (2018) は、地域の民

俗芸能の社会統合の力に焦点を当てている。藤原らも、被災地域の民俗芸能がコミュニケーションを深める媒介とみている（藤原・除本・片岡 2016）。筆者もまた、福島市大波地区において被災で生じた社会的分断の修復に焦点を当て、伝統芸能に限らず現代的な行事が場の共有を通して、復興に寄与することを明らかにした（長澤 2023）。本稿は、これらの議論を踏まえ、伊達市霊山町の「霊山太鼓」が誰によってどのように組織され、いかにして地域社会を結びつけてきたかを跡づけ、原発事故という極度の状況変化においても地域社会の健全性を維持したレジリエンスのありようを明らかにする。

現地調査は 2019 年 9 月に行った現地の状況の視察にはじまり、2023 年 10 月までに伊達市役所、および上小国地区の関係者 5 名の方に対して聞き取り調査を行った。

2. 霊山町の概要

霊山町は、1955 年に掛田町、霊山村、石戸村、小国村が合併して自治体となった区域であり、2006 年に伊達町、梁川町、保原町、月舘町と合併して、現在は伊達市域となっている。したがって霊山町制期は 1955 年から 2006 年まで 51 年間におよび、一定の地域的まとまりが醸成されていた。福島県伊達市内に位置する、総面積 87.33km²の農村地域である。福島駅から 16km ほどと都市部が近く、福島第一原発から北西に約 60km の距離となっている。霊山町域では東部に象徴的な名山である霊山があり、西麓の掛田地区は、霊山町における文化や産業の中心地となっている。伊達市全体の人口は、1920 年 62670 名から 1988 年 74573 名をピークに漸次増加し、それ以降は減少に転じ、2021 年で 57346 名となっている。霊山町の人口統計は 1955 年 15753 名から一貫して減少、2020 年で 6601 名にまで減少した。人口減少は産業構造や就業形態から必然であり、地域の健全性が決定的に損なわれているわけではないが、就労の遠隔化、農業の機械化、少子化による小学校の閉校など、地域社会の共同性が損なわれていく要因は多い。霊山町内は、大きく掛田、霊山、石戸、小国の 4 つの地区からなり、各地区の中でさらに神社を中心とした多くの集落に分かれる。本稿で焦点をあてる霊山太鼓は、これらの各集落で伝承されている。



図 1 伊達市と霊山町の位置

3. 「霊山太鼓」の概要

現在用いられている「霊山太鼓」の名称は、1984 年に「霊山太鼓まつり」というイベントを企画したさいに立案されたものである。もともとこの芸能は、霊山町のみならずこの地方一帯に分布していた祭礼時に演奏される笛太鼓の囃子だった。かつては各集落の神社ごとにあつたので 60 を超える笛太鼓の組織が存在したといわれるが、本稿で取り上げる「霊山太鼓まつり」が始められた 1984 年

時点では衰退が著しく、村祭りのさいに演奏される地域もわずかとなり、演奏を再開できる組織は31組にとどまった。本稿ではこの「霊山太鼓」の呼称に順じ、霊山地域一帯に伝承されてきた笛太鼓の囃子を便宜的に「霊山太鼓」と呼びたい。

霊山太鼓の起源は定かではない。江戸時代寛文年間が始まりと言われ、京都西陣に生糸を出荷していた関係から、この地域一帯に伝播したといわれている。これが各集落の祭礼時の笛太鼓として定着した。演目は十数曲、「陣太鼓」、「通り囃子」、「打ち囃子」、「始めの太鼓」、「中切りの太鼓」、「早中切りの太鼓」、「乱れ打ち」、「納めの太鼓・宮入りの太鼓」、「甚句」のほか、「うさぎうさぎ」、「おかざき」、「江戸」などの余興的な演目もある。始め太鼓から納めの太鼓までは、祭礼で神輿を扱うさいの、儀式として重要な演目となっている。これが祭礼で演奏されていたころの記憶が以下のようにつづられている。

秋祭りの季節である。冷害、凶作、雪害、風水害と打ち続いたが、今年も各地で祭りばやしが聞こえてくる。当町（霊山町）には、氏神様も加えると百五十を超える神社と、十三のお寺があり、それぞれ特徴ある祭典を行っている。（中略）昔は、村社の祭日は学校も休みだった。わずかな小遣いを握りしめ祭りに急ぐ。太鼓やはしの音が近づくにつれ、我慢が出来ない。つい走り出してしまった少年のころがなつかしい（佐藤健一1994）。

ここでは、かつての収穫の時期の村祭りの楽しさと、霊山太鼓が一体であったことが描かれている。芸の特徴としては大太鼓を太く短いバチで叩くこと、少しひねるようにして打つ技巧的な打ちかたなどがある。笛の旋律は古風で優雅な趣がある。ゆるやかな演目から、速く激しい演目まで、多彩である。現代的な太鼓に見られるような作為を感じない、古い伝承ならではの奥深さが感じられる。この芸について、霊山太鼓保存会に属する佐藤惣洋氏は次のように語ってくれた。

佐藤惣洋氏

自分のアドリブなんかも入れられるからね。だからずーっと、深いんですね。単調なリズムの中に、それぞれの視点の思いを入れられるっていう。その楽しみもあったんじゃないですか¹。

古い伝承に則った太鼓ではあるが、先に述べたような技巧的な打ち方などのなかに、演奏者それぞれの即興を加えられるなど、「深い」面白さをもった芸能であることがわかる。

練習の場面では、老若男女が広く交流し、笛太鼓の技の伝授によって深い交流がうながされるといえる。練習の機会は非常に多く設定されている。保存会に加入してまもない子供のためには通年おこなわれ、笛の講習会が年2回、初めて叩く人向けの太鼓講習会などがある。練習が頻繁にあるため、会員同士で親しくなり、家族のような関係になるという。

渡辺健一氏

もう、ほんとに家族のような感じです。そこで自分たちのコミュニティーじゃないですけども、太鼓があれば一緒に行って叩くみたいな²。

古い芸能としての趣や、演奏が「上手」な人に対する評価など、芸の質への関心を共有したつながりが形成されている。したがって、霊山太鼓に参加する人々のあいだには、芸への関心を共有しつつ、家族のようなつながりが醸成されるものと考えられ、霊山太鼓は地域社会の健全さや強さを高める資源となっているといえよう。

4. 第一回「霊山太鼓まつり」の組織化と実行

霊山太鼓は江戸時代から、各集落の神社に属し、祭りのときに演奏されてきた。戦後、産業構造の変化をはじめとした社会変動のなかで、利便性が高まるとともに個々人の生活の自己充足が促され、村の共同的生活は徐々に衰退していった。多くの集落で霊山太鼓が演奏される機会も減り、文化財として注目されることもなく、徐々に継承が途絶えつつあった。

こうした状況のなか、1985年、旧霊山町の商工観光担当の佐藤惣洋氏は、この部署に就いてすぐに「霊山太鼓まつり」を立案した。地域の同人雑誌「霊山」に以下のような記述がある。

担当者になったからには、何かしなければならぬ。まず思ったことは、霊山町には立派な山がありながら、なぜ観光客が少ないのか、昔は、年間30万人もの観光客がいたのが、今はその三分の一、8万人くらいに減っている。なぜなんだろう、という単純な発想でした（佐藤惣洋1990：48）。

ここには「霊山太鼓まつり」実行の発端をみることができる。佐藤氏が町の観光担当となったことで、まず観光振興への着想がある。そうしたなか、1985年の東北新幹線上野開業に合わせて、東北六県共同による観光振興の大型キャンペーンが展開されるが、それに先立って市町村の観光担当者会議が開かれた。そこで「新しい観光資源を開発するのも結構だが、従来の資源を見なおすことも大切だ」との意見を受けて、佐藤氏は自分の町にある素材を検討し始めた。そこで、盆踊りやお祭りのさいに演奏される笛太鼓の囃子が、町内各地区60カ所以上に存在することに着目した。

ところが、調査を進めると太鼓があっても打ち手が少なかったり、長らく打っていなかったりするなど、すでに衰退傾向が顕著であることがわかり、維持する仕組みが必要として保存会結成と練習開始が急がれた。手始めとして、町内の太鼓所持団体の会議を開き、町が進めるイベントの構想を説明するとともに、福島県文化課の懸田弘訓氏を招いて、郷土芸能を保存伝承する意義と重要性についての講演を行った。こうして「霊山太鼓」の社会的・歴史的意義の共有が図られたが、そこには地域住民の内発性を担保する意図もあったという。

(前略) 太鼓の歴史を知り、何のために今まで太鼓は打ち鳴らされて来たのか、等々を理解して頂くために講演を開いた訳であります。

この点をあいまいにしたまま、保存会を結成し練習に入ったとするならば、いつかは、「俺たちは、町からやらされているんだ、踊らされているんだ」という危険性があると思ったからでもあり、又郷土芸能を保存伝承する意義を理解しての練習であるならば、励みにもなるだろうと、考えたからでもあります(佐藤惣洋 1990:50)。

行政職員の企画として芸能のイベントを実行するのは、いわば「上から」の押しつけになりかねない。これを地域住民が「自分から」内発的に実行するために、霊山太鼓の歴史や意義を理解してもらうことを重視している。このように内発性を促進するために歴史や意義の理解を広めることは、芸能の継承やイベントの継続性の基盤を固めるうえで有効だと思われる。こうして1984年、霊山太鼓保存会が結成され、これと前後して各地区にも31組の単位保存会(たとえば「中組太鼓保存会」など)が結成された。

翌年の「第一回霊山太鼓まつり」に向けて、盛んに練習が行われるようになった。にわかには太鼓熱が高まり、古老たちをはじめ老若男女が練習に打ち込んだ。そのようすを佐藤氏は以下のように振り返っている。

佐藤惣洋氏

ほんとにね、お年寄りたちが一生懸命やってくれたんです。それが私は印象に残ってますねえ。私の力でなく、みんな周りの人たちが、ほんとにどうすっかって考えていた時に、ちょうどうまく、タイミングが良かったと。やらなかったらもう、消滅しただろうっていう。そういうくらいの時期まで来ていた時、ちょうどタイミングが良かったな。いまでもお年寄りの人たちとか先輩とかの思いがうれしいから、忘れられないです³。

31組にも及ぶ地区単位の保存会が一丸となって、懸命に練習に励んだことが伝わってくる。霊山太鼓が徐々に衰退するなか、タイミング良く東北新幹線上野開業のキャンペーンを契機として、霊山太鼓を継承する人々が奮起し、霊山太鼓まつりに向けて邁進したのである。こうしたなか、31組の保存会が同時に打つ「同時打ち」が発案された。本来、それぞれの地区で曲の内容が若干異なっているが、霊山町の皆が同時に演奏できるようにするために統一した曲を案出し、これを練習して「同時打ち」を完成させた。

以上の過程を経て、第一回霊山太鼓まつりは1985年8月3日と4日に、「霊山こどもの村」で開催された。太鼓の上演のほか、特産物の出店、アマチュアバンドのコンサート、ジャズダンス上演、のど自慢大会、盆踊り大会、ミス太鼓コンテスト、そのほか各種民俗芸能の招待公演など、多彩な内容となっており、「新幹線上野開通」という戦後産業社会の隆盛と合致したものだ。こうした高揚感のなか、霊山太鼓保存会全員およそ300名による「同時打ち」はかなりの迫力があつたという。

佐藤惣洋氏

もうみんなあれ見て、ジーンときた。いろんな人がね、いろんな立場で頑張ってくれたので⁴。

それは、まさに霊山町の地域住民の統合と結束を象徴的に表現したものであった。8月3日は4千人、4日は6千人と数多くの観客が詰めかけ、イベントは成功裡に終わった。

以上をまとめると、第一に、霊山太鼓まつりの開始は、霊山太鼓の衰退や消滅を食い止める機会となった。それは観光振興の企画をきっかけとしていたが、それだけでなく歴史や文化の啓蒙が図られており、伝統文化の継承を実現したといえるだろう。第二に、地域全体が練習に邁進し、霊山太鼓まつりの盛大な開催と上演の喜びを経験するような、地域住民の一体化のイベントが成功したことが挙げられる。

霊山太鼓まつりが行われ始めたことで、霊山町民は霊山太鼓のもとに集結し、活況と賑わい、そして深い絆を醸成してきた。「霊山」という象徴的な山のふもとにある「霊山町」は、51年に及ぶ歴史のなかで「霊山太鼓」という町民共通の資源を得て、霊山山麓に位置する「霊山子どもの村」という舞台で盛大に「霊山太鼓まつり」を行い、霊山町民の一体感を生み出してきたのである。これによって消滅の危機にあった霊山太鼓は、維持継承につなげられるばかりか、空前の活況を呈することとなった。以降、「霊山太鼓まつり」は継続されるようになり、2023年現在まで継続されている。ただし、原発事故以降、復興の意味合いを伴って再開されたころから、祭りは芸能人の公演をはじめとしたさまざまな要素を巻き込んで急拡大し、2019年に開催された第35回にはおよそ5万人の来場者があった。原発事故以降に関しては次節で述べていきたい。

しかしながら、1984年の霊山太鼓保存会結成時に31組あった単位保存会は、2024年現在17組に減少してしまっている。霊山町の人口が1985年の11439名から2020年の6601名へと35年間で大きく減少し過疎高齢化も進んでいることから、単位保存会の減少もその反映とみることができる。したがって、霊山太鼓は、霊山地域社会の人口減少に対して決定的な抑止力にはなっていないと考えられる。産業構造の変化や都市部への人口流出という社会変動は、抗いがたい大きな流れというほかない。さらに霊山地域には原発事故という災厄が襲いかかることになってしまうが、以下ではこうした急激な状況変化における霊山太鼓のありようを検討していく。

5. 原発事故による中断と復活

2011年3月11日、東日本大震災が発生した。翌日、福島第一原発の水素爆発が起こり、大量の放射性物質が伊達市域にも降り注いだ。4月以降、国や県が空間放射線量を測定したところ、伊達市域で高い放射能汚染が確認され、以降、産業や生活すべての面で大きな混乱が生じた（伊達市 2014）。農作物の廃棄と生産の停止、住民の避難、外出の制限、学校生活への影響、放射能測定や除染作業、国や東電の措置や、それへの不信と不満など、地域社会は甚大な被害と混乱に巻き込まれることとなった。とりわけ、霊山町においては特定避難勧奨地点の部分的指定によって住民間に賠償金の著しい格

差が生じ、社会的分断が生じてしまった。放射能に対する不安ばかりか、国の失策による無用な社会的分断まで引き起こされ、地域社会では落胆と危機感が広がった。信頼と絆による霊山町民の結びつきは、エリクソンが「集合的トラウマ」(Erikson 1976)と呼ぶような地域社会全員が共有するような傷つきを被り、いまでも癒えない傷を少なからず残している。また、地域の仕事、社会関係、自然環境などの総体が失われることを、除本理史は「ふるさとの喪失」(除本 2016)と呼んでいる。こうした事態は、その後の継続的な失望感や意欲減退にもつながっていることは想像にたやすく、山林は除染されず手つかずのまま、山菜やきのこの汚染が継続しているため、原発事故による被災は、今なお残された問題と言わなければならないだろう。

原発事故の混乱によって、2011年は霊山太鼓まつりも中止を余儀なくされた。地域社会に大きな混乱が生じているなか、とてもイベントを行える状況にはなかった。しかし、翌年2012年にはまだ社会的混乱が続くなか、霊山太鼓まつりを再開することとなった。実行委員らや地域住民には、祭りを続けなくてはいけないという意志があったが、従来会場だった霊山こどもの村は、放射線量が高く避難勧奨地点に指定されたことで使えなくなった。このため、手狭な霊山中央公民館で行われることとなった。原発事故前の2010年に参加した保存会が32組であったのに対して、2012年は18組にとどまった。これについて、以下のような発言がある。

佐藤惣洋氏

太鼓まつりのために戻ってきたとかって言う人たちが結構いるんで。いや、なつかしく、涙出るくらいうれしいなって、その話聞いた時はね。バラバラにされたけど、原発によって、ほんとに実施するかしないか、できないかっていう大変ななかでも、やっぱり、やるということになれば、もうみんな努力して、ある程度集まってきてくれる⁶。

原発事故によって「バラバラにされた」人々が、太鼓まつりの実行に向けて再び終結したことがわかる。サブタイトルとして「復興支援・日本のこころ霊山太鼓」と銘打たれているように、霊山太鼓は復興に寄与する重要な資源の役割を果たしていくことになる。翌年2013年も祭りは開催され、翌年2014年にはタイトルが「だてな復魂祭2014」と銘打たれるようになり「復興」の機運を高めながら、霊山町域だけでなく伊達市域全体の太鼓団体も参加するイベントへと発展していった。それは、原発事故によって離れ離れになった仲間が再び集合し、練習や上演を通してつながりを深める場を継続的に提供していたと考えられる。地域のつながりを維持強化する霊山太鼓は、社会的分断を強いられた霊山地域社会のレジリエンスに寄与する重要な資源と考えられるのである。

6. 「伊達市の祭り」へのシフト

霊山町民の祭りとして行われてきた「霊山太鼓まつり」は、原発事故以降、「復興」を旗印に展開するなかで、伊達市域全体の祭りへと発展していった。原発事故で中止となった2011年の翌年、

2012年はずでに見たように霊山中央公民館で小規模に行われた。ところが翌2013年、伊達市の中心部である保原町域の中心地に位置する保原総合公園で行われることになった。長らく「霊山子どもの村」で行われてきた祭りが「保原総合公園」へ移転した意味は大きい。保原は鉄道も通り、交通の便が良いため、参加者の増加につながる。会場も広く拡張性が高いため、より発展したコンテンツを盛り込むことができる。他方、このことは「霊山のまつり」という意味合いが必然的に薄れる端緒となったと考えられる。2013年の霊山太鼓まつりはサブタイトルとして「絆プロジェクト in 伊達市」と銘打っており「伊達市」の語が使われ始める。先述のように翌年2014年にはタイトルが「だてな復讐祭2014」となり、チラシではこのタイトルが最も大きく表示されるようになった。そして、2016年には「だてな太鼓まつり」となり、「太鼓まつり」としては「霊山」の名が置き換えられるに至った。とはいえ「だてな太鼓まつり」の一部に「霊山太鼓まつり」が組み込まれるかたちをとっている。この年には人気芸人であるサンドウィッチマンが出演するなど、イベントは総合的で中央志向・発展志向のフェスティバルの様相を呈してきた。いまや霊山太鼓はこのフェスティバルに組み込まれる一部にすぎず、上演時間も大幅に少なくなった。つまり、開催地、主催者、参加者、コンテンツなど、祭りの構造は組み替えられてきており、「霊山の祭り」から「伊達市の祭り」へとシフトしてきたといえよう。

霊山太鼓まつりは第一回の開催時、「東北新幹線上野駅開通」のキャンペーンに関わっているため、当初から「発展」に方向づけられている面がある。第一回から、コンサートやダンス上演、盆踊り大会ほか、盛りだくさんのプログラムとなっており、現代的な娯楽性が盛り込まれたイベントのフォーマットで始められている。霊山太鼓まつりは、霊山でおこなわれる霊山町民の祭りとしての意義がある一方で、現代的に開かれたイベントであり続けてきた。このため、東日本大震災を経て、復興に寄与する資源としての意義を担ってきた結果、伊達市の祭り、中央志向の祭りへと拡大、発展してきたのは自然なことかもしれない。その過程で霊山太鼓そのものの出番が縮減され、霊山町民自身のものという性格が薄れてきた面がある。

その一方で、若者が多く所属する保存会は祭りの発展に合わせて活気づいており、頻繁に外部での公演も経験するなど、霊山太鼓が発展するうえでの重要な担い手となっている。つまり、活気ある団体と、衰退する団体で格差が生まれているといえるかもしれない。しかし、本稿で見いだされた霊山太鼓まつりの意義は、霊山地域における仲間たちのつながりと、急激な状況変化に対応する地域社会のレジリエンスに寄与する側面であった。「伊達市への拡張」による出番の縮減や、「発展」による格差は、一時的な来場者数増加や都市的イベントの華やかさを獲得する一方で、今後縮小的な変容が避けられない地域社会の持続的な強靭さを付与するレジリエンスを弱めてしまう恐れがある。震災後、落胆し、集合的トラウマを抱えてしまった霊山地域においてはなおさらのことである。いまいちど霊山太鼓の霊山地域内で発揮される力に目を向け、霊山太鼓全体の包括的な活性化を目指してもよいのではないか。そのためには、大きく発展してきた伊達市域の祭りは継続しつつ、霊山町内で行われる霊山太鼓の祭りを新設してもよいのかもしれない。

7. おわりに

現在、霊山太鼓は重要な地域伝統文化として注目され、上演機会も多く、活況を呈している。しかし、1980年代のはじめころは、戦後の高度成長と担い手の流出によって、衰退の一途にあった。各地に散在し失われつつあった笛太鼓が観光振興施策をきっかけとして復活するとともに、祭りの実行に向けて地域住民が一丸となっていったことは、霊山太鼓にとっての大きな転換点であったとみられる。以後、霊山太鼓まつりでの上演を軸として、霊山太鼓の文化と霊山町は大いに活気づき、霊山町民の精神的な統合や、担い手同士のつながりは深められてきた。

そうしたなか、霊山地域は原発事故によって大きなダメージをこうむり、急激な状況変化を強いられた。放射能が降りかかったことによる不安や分断など、地域全体が集合的トラウマを被ることになった。こうした状況のなか、霊山太鼓とそれがつくりだす協働の場は、人々のつながりを維持し、離ればなれになった仲間たちを再集結させるなどして、地域社会の修復に大きく寄与してきたと考えられる。人々のつながりの強さが地域社会のレジリエンスを強めるとするならば、霊山太鼓まつりを契機として活況を呈してきた霊山太鼓は、霊山地域社会のレジリエンスを構成する重要な一要素であることは疑いないだろう。

霊山太鼓が軸となって、人々が協働し、交歓し、結びつけられる。それはキーパーソンの導きをきっかけとしつつも、ひとりひとりの担い手の努力と、それを支える地域住民が結集することで実現してきたものである。こうして霊山太鼓は、急激な状況変化においても回復に寄与する地域社会のレジリエンスを強化してきた。これらの過程から霊山太鼓は、柔軟でありつつ強靱なレジリエンスを維持する霊山地域社会の軸をなす芸能として、重要な意義をもっていることが確認される。今後、地域の過疎高齢化ばかりではなく、社会全体の人口減少は避けられず、縮小社会の構想が重要になる。さらには気候変動や食料危機など、とりまく環境の悪化は避けられない。こうしたなか、コンパクトで強靱な社会を構想するうえで、地域に根ざし、人々をつなぐ霊山太鼓が示唆するところは大きいだろう。

参考文献

- Aldrich, Daniel P, *Building Resilience, Social Capital in Post Disaster Recovery*, Chicago, The Chicago University Press. (= 2021『東日本大震災の教訓 復興におけるネットワークとガバナンスの意義』ミネルヴァ書房.)
- 伊達市 2014『東日本大震災・原発事故 伊達市3年の記録』伊達市
- Erikson, Kai T., 1976, *Everything in its Path: Destruction of Community in the Buffalo Creek Flood*, New York: Simon and Schuster. (= 2021『そこにすべてがあった バッファロー・クリーク洪水と集合的トラウマの社会学』夕書房.)
- 藤原遥・除本理史・片岡直樹 2016「福島原発事故の被害地域における住民の期間と「ふるさとの変質、変容」被害一川内村における伝統芸能継承の困難を事例として—『環境と公害』46号2巻: 60-66.
- Morin, Edgar and Kern, Anne, Brigitte, 1993, *Terre-Patrie*, Paris: Éditions du Seuil. (= 1993, 菊池昌実訳『祖国地球』法政大学出版局.)
- 長澤壮平 2007「資源としての民俗文化の動態—岩手県岳神楽を例に—」『日本民俗学』250号: 1-26.

- 2010 「農村における伝統的祭礼の現在的意義—山形県鶴岡市櫛引町の王祇祭を例に—」『南山宗教文化研究所報』20号：12-22.
- 2023 「地域の行事を通じた分断修復—福島市大波地区における社会的分断と修復への努力」成元哲・牛島佳代編『原発分断と修復的アプローチ』東信堂：147-167.
- 佐藤健一 1994 『町政雑記』
- 佐藤惣洋 1990 「霊山太鼓まつりとむらおこし」『雑誌 霊山』10号：48-65.
- 高倉浩樹 2018 「福島県の民俗芸能と減災無形文化遺産—災害復興政策になぜ無形文化財が必要なのか—」高倉浩樹・山口睦編『震災後の地域文化と被災者の民俗誌—フィールド災害人文学の構築—』新泉社：130-146.
- 除本理史 2016 『公害から福島を考える—地域の再生をめざして』岩波書店
- Zolli, Andrew and Ann, Marie, Healy, 2012, *Resilience*, New York: Free Press. (=2013, 須川綾子訳『レジリエンス 復活力—あらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何か』ダイヤモンド社.)

注

- 1 2023年10月聞き取り。佐藤惣洋氏は1948年生まれ。
- 2 2022年9月聞き取り。佐藤健一氏1973年生まれ。石田東部の保存会に所属しており、聞き取り調査当時、霊山太鼓保存会会長を務めていた。
- 3 2023年10月聞き取り。
- 4 2023年10月聞き取り。
- 5 2022年9月聞き取り。直江市治氏は1949年生まれ。霊山太鼓まつりの第一回から実行委員として参画しており、原発事故当時は実行委員長を務めた。
- 6 2022年9月聞き取り。